

義湘の法界縁起観

李 道 業 (杏 九)

一. 序

法界縁起思想とは現実に存在している諸法はどこから発生したのか、または如何にして生成されたのかと言う諸法の発生論や生滅論についての説明ではなく現実世界の箇箇物物は如何なる関係において存在するのかを説く諸法の存在様態論と言える。その故に法界縁起とは、縁起の諸法は円融無碍にして相即相入し、重重無盡に相依相成していると見る思想である。

言い変わると法界縁起思想とは縁起の諸法は①時間的に、②空間的に、③主件的に円融無碍に相即相入していると見る思想である。

このような法界縁起思想は、中国では智儼の「華嚴一乗十玄門」に、法蔵の「六相円融論」に、そして澄観の「四種法界説」に依って体系化されて来たのである。

二. 義湘の「縁起六門」

新羅の義湘(625-702)は法界縁起、即ち、諸法の存在様態を「縁起六門」をもって説明している。

義湘には『華嚴一乘法界図』(以下、『法界図』と略称す)1巻の著作がある。この『法界図』は赤印と7言30句の法性偈から成っている。義湘は、最初の18句は自利行を、次の4句は利他行を、そして最後の8句は方便及び得利益をあらわすものであると説明した後に、最初の18句を再び次のように六門に分けて説明している。

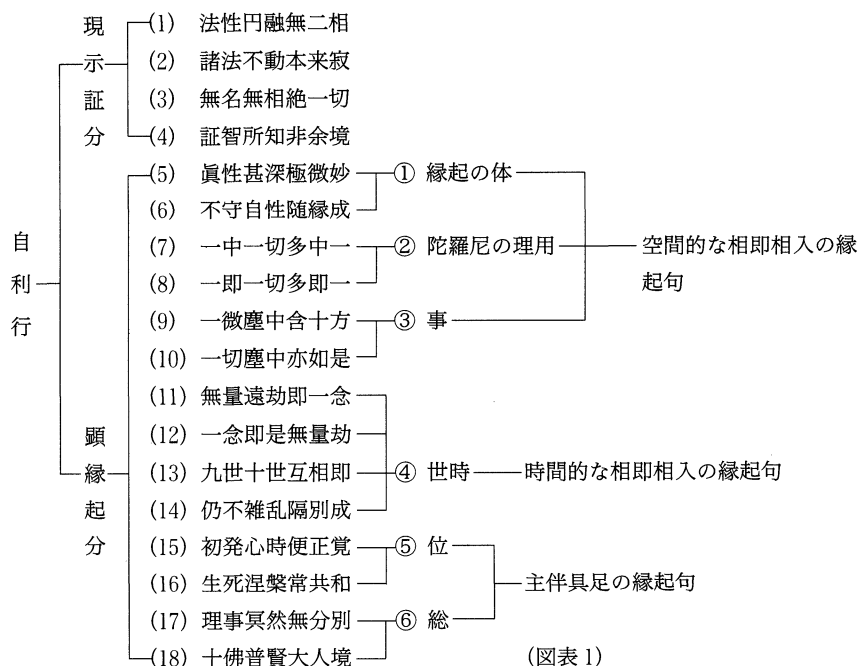
義湘は『法界図』において

就初門中有二 初四句現示證分 二次十四句顯縁起分 此中初二句 指縁起体 二次二句 約陀羅尼理用以辨撰法分齊 三次二句即事 撰法分齊 四次四句 約世時示撰法分齊 五次二句 約位以彰 撰法分齊 六次二句 総論上意 雖六門不同 而唯顯縁起陀羅尼法¹⁾と説いている。義湘は自利行18句を證分と縁起分に分けた後、第(5)句から第(18)句までの14句を①縁起の体、②陀羅尼の理用、③事、④世時、⑤位、⑥総論

の六門に分けて説明している。義湘が説くこの縁起分の14句は法界縁起そのものである。

『法性偈』30句の中で第(5)句と第(6)句の2句は「縁起の体」を現わし、第(7)と第(8)の2句は陀羅尼の理用に約して摂法の分斉を現わし、次の第(9)と第(10)の2句は事に即して摂法の分斉を現わすものであると言う。次の第(11)から第(14)までの4句は世時に約して摂法の分斉を現わすものであり、第(15)と第(16)の2句は位に約して摂法の分斉を現わすものであり、第(17)と第(18)の2句は上の意を総体的に論ずるものであると義湘は説明している。

私は(図表1)におけるように第(5)句から第(10)句までの6句は空間的な相即相入を現わす縁起句に、第(11)句から第(14)句までの4句は時間的な相即相入を現わす縁起句に、第(15)句から第(18)句までの4句は主伴具足の相即相入を現わす縁起句に解釈したいのである。これを分かり易く表示すると次の如くなる。



(19) から (30) までは省略する。

((1) (2) (3) あるいは①②③等の番号は筆者が付けたものである。)

この図表(1)から分かるように義湘は、第(5)句から第(18)句までの14句を六門

に分けて縁起分を現わすものであると説明しているが、筆者は先に言及した通りにこの六門を1)空間的相即相入句、2)時間的相即相入句、3)主伴的相即相入句の三門に要約した。その理由は法界縁起とは事事無礙法界であり、無障礙法界である。それは諸法の空間的、時間的、主伴的な円融無礙と相即相入を説くものと理解されるからである。

三、義湘の縁起六門と華嚴経との関係

義湘は、『法界図』は『華嚴経』と『十地経』に依って円教の宗要を現わしたものであると言っている²⁾。それでは義湘等の華嚴教育家達は『一乗十玄門』や「六相円融論」あるいは「縁起六門」等の法界縁起思想の体系を『華嚴経』の如何なる経文から取って作ったのであろうか。以下では義湘の「縁起六門」を空間的、時間的、主伴的な相即相入の縁起句の三門に要約して、法界縁起思想の源流句を『華嚴経』から抜萃整理して見たい。

(1) 空間的相即相入の縁起句

ここで「空間的相即相入」の縁起句とは縁起の諸法が空間的に円融無礙にして重重無盡に相即相入する相をあらわす経句を言う。義湘の法性偈から示すと第(7)一中一切多中一や第(9)一微塵中含十方のような形の縁起句になる。この空間的な相即相入が可能なのは縁起の諸法は無礙自在にして大小、多少、近遠等が無礙であるからである。

それでは『華嚴経』に説かれている法界縁起句として「空間的な相即相入」を現わす経文には如何なるものがあるのであろうか。

- ①一切佛刹微塵等 爾所佛坐一毛孔 皆有無量菩薩衆 各為具說普賢行
無量刹海如一毛 悉坐菩提蓮華座 遍滿一切諸法界 一切毛孔自在現³⁾
- ②於一塵内 微細國土 一切塵等 悉於中住⁴⁾
- ③以一國土滿十方 十方入一亦無余 世界本相亦不壞 無比功德故能爾⁵⁾(「盧舍那佛品」)

と説かれている。これらの経文は義湘の法性偈で言うると一即一切多即一の論理である。法蔵は、『十玄門』の中の第四「因陀羅網境界門」を説明する時に①の経文を⁶⁾、第五「微細相容安立門」を説明する時には②の経文を引用している⁷⁾。そして③の経文は智儼に依って「一多相容不同門」の説明に引用されている⁸⁾。智儼や法蔵はこれらの経文を引用して縁起の諸法は円融無礙に相即相入していることを説明している。『華嚴経』では

④一中解無量 無量中解一 展転生非実 智者無所畏⁹⁾（「如来光明覚品」）
 ⑤如一微塵所示現 一切微塵亦如是 是名三昧自在力 亦無量称解脱力¹⁰⁾（「賢首菩薩品」）
 ⑥諸佛子 彼菩薩應学十法 何等為十 所謂知一即是多 多即是一¹¹⁾
 ⑦若一即多多即一 義味寂滅悉平等 遠離一異顛倒相 是名菩薩不退位¹²⁾（「菩薩十住品」）
 と説かれている。智儼は『一乘十玄門』における数法の「異体門」の説明に④と⑦の經文を¹³⁾、「因陀羅網境界門」の説明に⑤の經文を¹⁴⁾そのまま引用しており、法蔵は『五教章』において「諸法相即自在門」の説明に⑥の經文をそのまま引用して¹⁵⁾諸法の相即相入を論理化している。

- ⑧譬如数法十 増一至無量 皆悉是本数 智慧故差別¹⁶⁾（「菩薩説偈品」）
 ⑨於一微塵中 各示那由他 無量数諸佛 於中而説法
 於一微塵中 見無量佛國 須彌金剛圍 世間不迫迮¹⁷⁾（「十地品」）

と説かれている。これら經句は、縁起の諸法は円融無礙にして相即相入することを「一中一切多中一」の理論として表現している經文である。智儼は『一乘十玄門』の「異体門」の説明に⑧の經句を引用しており¹⁸⁾、「因陀羅網境界門」の説明には⑨の經文を引用している¹⁹⁾。

- ⑩一一微塵中 有無量佛刹 一中知無量 無量中知一²⁰⁾（「普賢菩薩行品」）
 ⑪無量諸境界 悉從心縁起 一切諸法界 皆入一毛道²¹⁾（「宝王如来性起品」）
 ⑫一念悉了知 一切刹微塵 一一微塵中 見無量刹海²²⁾（「入法界品」）

と説かれている。これらの經句を要約すると義湘の法性偈の第(7)「一中一切多中一」第(8)「一即一切多即一」と第(9)「一微塵中含十方」第(10)「一切塵中亦如是」の4句にまとめられる。換言するとこれらの經句は、縁起の諸法は円融無礙にして重重無盡に相即相入していることをあらわすものであるといえる。

(2) 時間的相即相入の縁起句

義湘は『法界図』において²³⁾、法性偈の縁起分18句の中の第(11)無量遠劫即一念 第(12)一念即是無量劫 第(13)九世十世互相即 第(14)仍不雜亂隔別成等の4句は世時に約して摂法の分齊をあらわすものであると説いている。縁起の諸法は円融無礙にして重重無盡に時間的に相即相入しているが、『華嚴經』には時間的な相即相入句として如何なるものがあるのだろうか。

- ①無量無数劫 能作一念頃 非長亦非短 解脱人所行²⁴⁾（「十行品」）
 ②所謂一劫撰阿僧祇劫 阿僧祇劫撰一劫 有数劫撰無数劫 無数劫撰有数劫…中略…長劫撰短劫 短劫撰長劫 諸劫撰相 皆如実知²⁵⁾（「十地品」）

- ③入一切劫非劫 入非劫一切劫 入一切劫即是一念²⁶⁾
 ④現在世説未來世 現在世説過去世 現在世説平等 現在世説三世即一念²⁷⁾
 ⑤深入無量劫 究竟到彼岸 無量劫一念 一念無量劫²⁸⁾ (「離世間品」)
 ⑥一念中偏入 不可説諸劫 知念無礙者 安住此法堂²⁹⁾ (「入法界品」)

と説かれている。義湘はこの①③⑤⑥等の經文から第(11)「無量遠劫即一念」第(12)「一念即是無量劫」の偈頌を詠み、②や④の經文から第(13)「九世十世互相即」第(14)「仍不雜亂隔別成」の偈頌をつくったと考えられる。

ここに列挙した『華嚴經』の經文は、縁起の諸法は時間的に相即相入していると言う法界縁起思想をあらわすものであるといえる。智儼は『一乘十玄門』において、三世の各々の三世と一念を合わせれば十世になる。このような十世は縁起力のために相即相入しつつも三世を失わず、十世は同時に相即相入しつつも十世を失わないのであると説き、かつ先の①③の經文を引用して説明している³⁰⁾。法蔵もまた「十世隔法異成門」を説明しながらかつ②の經文を引用している³¹⁾。

以上の經文は諸法の時間的な相即相入をあらわす縁起句であり、智儼や法蔵はこれらの縁起句を基盤にして十玄門の体系を完成し、義湘は「法性偈」の縁起六門を述べていると言える。

(3) 主伴具足の縁起句

ここで主伴具足というのは、主即伴であり、伴即主であるという意味である。經文からいうと衆生即佛であり、初発心即正覚であると見る立場である。『華嚴經』には

- ①初発心時便成正覚 知一切法眞實之性 具足慧身不由他悟³²⁾
 ②此初发心菩薩即是佛故 悉興三世諸如来等 亦興三世佛境界等³³⁾ (「梵行品」)
 ③心如工畫師 盡種種五陰 一切世界中 無法而不造
 如心佛亦爾 如佛衆生然 心佛及衆生 是三無差別³⁴⁾ (「菩薩説偈品」)

と説かれている。ここで①②③の經文は初発心と正覚、または衆生と佛が無礙に相即相入することをあらわしている。換言するとこれらの經文は主と伴が無礙に相即相入することをあらわすものであるといえる。義湘は法性偈の「縁起句(14)句」の中の第(15)「初发心時便正覚」と第(16)「生死涅槃常共和」の2句を位に約して撰法の分齊をあらわす³⁵⁾と説いているが、ここの經文もまた位に約して主伴の相即相入をあらわしたものであるといえる。法蔵は『五教章』において、十玄門の第三「諸法相即自在門」の説明に①と②の經文を引用している³⁶⁾。

これまで法界縁起の源流を「空間的相即相入句」「時間的相即相入句」そして「主伴具足の相即相入句」の三門に分けて『華嚴経』から抜萃して見た。

この三門はすべて法界縁起をあらわすものであることはいうまでもない。

後代の華嚴家達は以上の経句を体系化して十玄縁起説や六相円融説あるいは四種法界説として表わしており新羅義湘は法性偈の「縁起六門」に体系化している。

- 1) 大正蔵 45, p. 712 中. 2) 義湘『法相図』(大正蔵 45, p. 716 上). 3) 大正蔵 9, p. 408 上. 4) 大正蔵 9, p. 410 下. 5) 大正蔵 9, p. 414 中. 6) 法蔵『五教章』巻 4 (大正蔵 45, p. 506 上). 7) 大正蔵 45, p. 506 中. 8) 智儼『一乗十玄門』(大正蔵 45, p. 517 中). 9) 大正蔵 9, p. 423 上. 10) 大正蔵 9, p. 434 下. 11) 大正蔵 9, p. 446 上. 12) 大正蔵 9, p. 448 中. 13) 大正蔵 45, p. 514 中. 14) 大正蔵 45, p. 516 中. 15) 大正蔵 45, p. 506 中. 16) 大正蔵 9, p. 465 上. 17) 大正蔵 9, p. 564 上. 18) 大正蔵 45, p. 514 中. 19) 大正蔵 45, p. 514 中. 20) 大正蔵 9, p. 609 上. 21) 大正蔵 9, p. 626 上. 22) 大正蔵 9, p. 754 中. 23) 大正蔵 45, p. 712 中. 24) 大正蔵 9, p. 473 中一下. 25) 大正蔵 9, p. 572 下. 26) 大正蔵 9, p. 634 上. 27) 大正蔵 9, p. 634 上一中. 28) 大正蔵 9, p. 672. 29) 大正蔵 9, p. 771 中. 30) 大正蔵 45, p. 517 上. 31) 法蔵『五教章』巻 4 (大正蔵 45, p. 506 下). 32) 大正蔵 9, p. 449 下. 33) 大正蔵 9, p. 452 下. 34) 大正蔵 9, p. 465 下. 35) 義湘『法界図』(大正蔵 45, p. 712 中). 36) 法蔵『五教章』巻 4 (大正蔵 45, p. 505 下).

〈キーワード〉 義湘, 法界縁起, 『華嚴一乘法界図』

(東国大学校教授, 文博)